〈研究論文〉

OECDのキー・コンピテンシーの理論的根拠に関する一考察（3）

——「コンピテンシー」に焦点を当てて ——

藤　井　穂　高

〈研究論文〉

OECDのキー・コンピテンシーの理論的根拠に関する一考察（3）

――「コンピテンシー」に焦点を当てて ――

藤　井　穂　高

はじめに

今日，初等教育から高等教育まで〈新しい能力〉概念が提案され，教育政策等に大きな影響を与えているといわれる（松下 2010：1）。その際にしばしば参照されるのがOECDのキー・コンピテンシーである。たとえば，文部科学省の「育成すべき資質・能力」に関する検討会の報告では，キー・コンピテンシーはPISA調査にも取り入れられ，「大きな影響を与えている」と評価されている（育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価のあり方に関する検討会 2014：9）。

キー・コンピテンシーの策定を企図したOECDの試みは，DeSeCoプロジェクトと呼ばれている。DeSeCoとは，“Definition and Selection of Competencies：Theoretical and Conceptual Foundations”（コンピテンシーの定義と選択：理論的・概念的基礎）の略語であり，副題の通り「理論的・概念的基礎」を学際的に検討する点に特色がある。

筆者はこれまでこの特色に着目し，キー・コンピテンシーの理論的枠組みである「3つのカテゴリー」と「省察性」について論考を発表してきた（藤井，2017，2018）。本論もその一環であり，「コンピテンシー」を取り上げたい。

DeSeCoプロジェクトに関するわが国の先行研究では，今西（2008），渡邊（2009），奈良（2010），宮嶋（2010），倉田（2017），福田（2017）等においてキー・コンピテンシーを主題として検討しており，一定の蓄積はあるものの，DeSeCoプロジェクトの経緯をたどる中で，「コンピテンシー」の概念を検討したものは管見の限り見当たらない。

そこで本論は，キー・コンピテンシーの策定過程を振り返る中で[1]，「コンピテンシー」に焦点を絞り，その「概念的基礎」を検討することを課題とする。具体的には，まず，「概要」（2005年）に至るまでの経緯を確認する。次に，最終報告書（2003年）を素材として，コンピテンシーの構成要素とその理論的背景を整理・分析する[2]。さらに，コンピテンシーの概念の定義に係り大きな役割を果たしたとされるドイツの心理学者Weinertの論文を検討する。また，コンピテンシーとキー・コンピテンシーの関係についても併せて考えてみたい。

1．「概要」（2005年）に至る経緯

最初に，DeSeCoプロジェクトの諸資料から，コンピテンシーの定義に関する箇所を抜き出し，一覧に示す。最終的な定義は，2005年の「概要」によると，「特定の文脈において，心理社会的な資源（スキルや態度を含む）を活用し動員することにより，複雑な要請に対処する能力」としてまとめられているが（OECD 2005：4）[3]，その経緯を振り返ると，次頁の表1の通りである。

「概要」（2005）の定義を3つの要素，すなわち，①複雑な要請，②心理社会的資源，③特定の文脈に分けるならば，「複雑な要請」は1999年の年次報告書からすでに用いられている。また，認知的な要素のみならず，動機づけ等についても初期から要素に含まれていたとみることができる。その一方で，第2回国際シンポジウムの討議資料（2002年1月）までは，「特定の文脈」は表に出ることはなく，最終報告書（2003年）以降にこの言葉が盛り込まれている。反対

筑波大学　人間系

表１　コンピテンシーの定義に係る経緯

資料名	定義
1999 年 4 月 Weinert 報告書「コンピテンスの概念」(Weinert 1999：3)	「コンピテンスは、学習された、認知的で要請に特有の実行能力の特性（cognitive demand- specific performance disposition）であるとみなされ、関連するメタコンピテンスと動機づけがこの構成概念の分析に含まれることを推奨する。」
2000 年 5 月 1999 年の年次報告 (OECD/SFSO 2000：5)	「コンピテンスの概念は認知的な構成要素を含むべきであり、複雑な要請をうまく習得するための前提条件の獲得のために学習プロセスが必要な条件である場合にのみ用いるべきである。」
2000 年 9 月 INES 報告 (Rychen and Salganik 2000：8)	「コンピテンスの概念は高度な複雑性の要請に対処する能力を表すものであり、複雑な行為システムを含んでいる」
2001 年 3 月 2000 年の年次報告 (OECD/SFSO 2001a：8)	「コンピテンシーは高度な複雑性の要請に対処する能力である。コンピテンシーは、知識やスキルのみならず、知識とスキルを適用するために必要な方略や手順、同様に適切な情動と態度、こうした要素の効果的な自己調整も含んでいる。」
2001 年 最初の報告書 (Rychen 2001：8-9)	「第 1 に、コンピテンスの概念は、複雑な要請にうまく対処するために個人または集団にとって役に立つ必要な前提条件を表すときにのみ用いられるべきである。こうした要請がコンピテンシーの構造を規定する。第 2 に、コンピテンシーは一般に複雑な行為システムを含意しており、知識やスキルのみならず、知識とスキルを適用するために必要な方略や手順、同様に適切な情動と態度、こうしたコンピテンシーの効果的な自己調整も含んでいる。」
2002 年 1 月 第 2 回国際シンポジウム討議資料（Rychen and Salganik：2002 5)	「コンピテンスは、複雑な要請にうまく対処し、又は、複雑な活動や任務を遂行する能力である。」
2003 年 4 月 ハイライト (Rychen and Salganik 2003c：4)	コンピテンスは精神的な前提条件の動員を通して複雑な要請にうまく対処する能力と定義される。各コンピテンスはある要請の回りに構造化され、特定の文脈における効果的な行為のために合わせて動員されうる、相互に関連する認知的及び実際的スキル、知識、動機づけ、価値と倫理、態度、情動と他の社会的、行動上の要素の結びつきを表す。
2003 年 最終報告書（Rychen and Salganik 2003a：43)	「コンピテンスは、特定の文脈において、心理社会的前提条件（認知的及び非認知的要素の双方を含む）を動員することを通して、複雑な要請にうまく対処する能力と定義される。」
2003 年 11 月 最終報告書の概要 (OECD/DeSeCo/Rychen 2003：2)	「コンピテンスは特定の文脈における複雑な要請にうまく対処する能力である。満足のいく（competent）遂行又は効果的な行為は、知識、認知的及び実際的なスキルと同様に、態度、情動、価値や動機づけといった社会的及び行動上の要素の動員を含む。」
2004 年 Rychen 論文（Rychen 2004：321）	「コンピテンスは複雑な要請に対処する能力として定義される。各コンピテンスは相互に関連する認知的及び実際的なスキル、知識と、動機づけ、価値や倫理、態度や情動といった個人的資質の結びつきに相当する。こうした諸要素は特定の文脈における効果的な行為のために合わせて動員される。」
2005 年 5 月 「概要」(OECD 2005：4)	「特定の文脈において、心理社会的な資源（スキルや態度を含む）を活用し動員することにより、複雑な要請に対処する能力」

に，初期の定義に含まれていたメタコンピテンス（1999年Weinert報告書）や自己調整（2001年の最初の報告書）などメタレベルの要素については，最終的な定義から漏れていることもわかる。

DeSeCoプロジェクトは，その名称の通り，「コンピテンシーの定義と選択」を課題とするものであるが，定義が定まってからコンピテンシーの選択が行われたわけではない。すでに明らかにしたように（藤井，2017，2018），キー・コンピテンシーの理論的枠組みになる，「３つのカテゴリー」についても「省察性」についても，コンピテンシーの定義と並行して検討がなされており，紆余曲折を経ている。したがって，最初の報告書（2001年）でのコンピテンシーの定義に関する説明は表1の通りであるが，同報告書の序においては，「本書のすべての論考では，コンピテンスの概念は，考え，活動し，そして学ぶことができるといった比較的漠然とした意味で用いられている」（Rychen 2001 : 8)とも述べられている。

なお，一読の限りでも，「コンピテンシー」と「コンピテンス」の混在は明らかであるが，本論では原語に合わせて訳語を当てている[(4)]。両者の区別については，最初の報告書（2001年）に説明がある。それによると，フランス語のcompétenceとドイツ語のKompetenzに対応する英語としてコンピテンスとコンピテンシーがあり，前者は概念及びその理論化又は特定のスキルやコンピテンシーのレベルを示すときに，後者はある人が対処する特定の要請に関する場合に用いられるとしている（Rychen 2001 : 3)。ただし，この区別がDeSeCoのその後の検討で生かされているわけではない。

２.「最終報告書」（2003年）における「コンピテンシー」

「概要」（2005年）には定義はあるものの，その中身に関する検討の説明がない。そこで，ここでは最終報告書（2003年）を素材として，定義の理論的根拠とそこで参照されている先行研究について検討したい。

最終報告書は第２章に「コンピテンスのホリスティック・モデル」を配置し，その中に「コンピテンスの概念」と題する節を設けている[(5)]。同章の執筆者は，最終報告書の編者でもあるD. S. RychenとL. H. Salganikの２人である（以下，「Rychen & Salganik論文」と略記）。

Rychen & Salganik論文では，最初に，これまでの関連する調査研究では意味論的，概念的な検討が中心ではなかったのに対し，DeSeCoはその正式名称の通り，コンピテンスの概念の定義から始める，と宣言する（Rychen and Salganik 2003b : 41-42)。次に，「観念や概念はそれ自体に定義を含んではおらず，それらは社会的に構成される」という考え方を「私たちの前提」として示す。つまり，定義の考え方自体に限定を加えている。その上で，理論的検討のレビュー（Weinert 2001）によると，コンピテンスの概念の単一的な使用法も広く受容された定義もないことから，「Weinertの提言とその後のプロジェクト内での議論」に従い，私たちは，Weinertの呼ぶ「概念的実用主義」，すなわち「科学的に説得力があり実用的にも役に立つ仕方で」コンピテンスという用語を定義するとして，定義の基本方針を示している（Rychen and Salganik 2003 b : 42)。

（1）Rychen & Salganik論文の参照論文の傾向

具体的な定義の検討に入る前に，ここではRychen & Salganik論文の参照している論文を見ることにより，その理論的根拠の傾向を示しておきたい。

次頁の表２では，参照論文（とその被引用回数）を筆者の観点で４つに分類している。表の分類記号は，“A”が当初に寄稿を依頼された５人の論文，“B”は2001年に刊行された最初の報告書（2001年）の所収論文，“C”は第２回国際シンポジウムの報告書（2003年）所収論文，“D”はその他を表している。

この表から明らかなように，Rychen & Salganik論文は主に４つの論文，すなわち，Weinert (2001)，Oates (2003)，Gonczi (2003)，Keating (2003) の各論文を理論的根拠にしている。一方で，キー・コンピテンシーの「中心」

表２　Rychen & Salganik論文における参照論文とその被引用回数

参照資料	被引用回数	分類	参照資料	被引用回数	分類
Canto-Sperber & Dupuy (2001)	2	A	Witt & Lehmann (2001)	2	D
Haste (2001)	2		Binklry, Sternberg, Jones & Nohara (1999)	1	
Levy & Murnane (2001)	2		Lave & Wenger (1990)	1	
Perrenoud (2001)	2		Le Boterf (1994, 1997)	1	
Weinert (2001)	17	B	Oates (1999)	1	
Keating (2003)	5		OECD (2000)	1	
Kegan (2001)	2		OECD (2001)	1	
Salganik (2001)	1		OECD & Human Resources Development Canada (1995)	1	
Oates (2003)	12	C	Torney-Purta, Lehmann, Oswald & Schulz (2001)	1	
Gonczi (2003)	9		Weinert (1999)	1	
Fratczak-Rudnicka & Torney-Purta (2003)	2				

に位置づけられる省察性（reflectiveness）の理論的根拠とされたKegan (2001)やPerrenoud (2001)など（藤井 2018）や「３つのカテゴリー」において参照されたCanto-Sperber & Dupuy (2001)やHaste (2001)など（藤井 2017 : 5）はあまり参照されていないことがわかる。

(2)「コンピテンスの概念」

次に，同論文の「コンピテンスの概念」の節に焦点を絞り，具体的な中身と参照論文を確認したい。同節は，３つ項からなっているが，それぞれの標題，すなわち「コンピテンスへの機能的アプローチ」,「内的構造」,「文脈依存性」が，コンピテンスの概念の３つの要素を表している（Rychen and Salganik 2003 b : 43‒47)。

①「コンピテンスへの機能的アプローチ」

本項では最初に,「コンピテンスは，特定の文脈において，心理社会的前提条件（認知的及び非認知的要素の双方を含む）を動員することを通して，複雑な要請にうまく対処する能力と定義される」と定義を示す。なお，ここでは「前提条件」(prerequisites) という言葉が用いられているが，2005年の「概要」では「資源」に改められることになる。

この定義に続けて，これは「要請指向型(demand-oriented) 又は機能的アプローチ」を表しているとし,「このコンピテンスへの機能的アプローチは，個々人が仕事や日常生活において直面する複雑な要請や課題を概念の中心に据えるという利点を持っている」と説明する(6)。また,「もっとも重要な焦点」は，たとえば特定の職業上の地位，社会的役割又は個人的計画に関して，個々人が行為，選択又は活動の仕方を通して達成する「結果」に当てられているとも述べている。以上の説明は「要請志向型」の「利点」を示すものであるが，なぜ「複雑な要請」が定義に含まれたのか，その根拠を示すものとは言い難い。

参照論文を見るならば,「要請志向型」のコンピテンシーの例として，Haste (2001), Levy & Murnane (2001), Oates (2003) の論文が引かれているが，先の「要請指向型又は機能的アプローチ」については，注が付されており,「こ

の論点のより包括的な議論は，Weinert (2001) とWitt and Lehmann (2001)を参照」と記していることから，この項の内容はこの２つの論文に依拠していることがわかる（Rychen and Salganik 2003b : 43)。このうち後者は，DeSeCoプロジェクトの一環として行われた「国別報告プロセス」において報告書を提出した国々の中のドイツの報告書である。前者については後に改めて検討する。

②「内的構造」

第２の要素である「内的構造」について，本項は，上記のドイツの報告書であるWitt and Lehmann (2001)から「機能的アプローチがなければコンピテンシーにとって適切性 (relevance) の考察は不可能であるし，内的構造の研究がなければ単なる「〜する能力」という表現の誘惑と罠を防ぐ壁を築くことはできない」という部分を参照し（Rychen and Salganik 2003 b : 44)，このように要請志向型アプローチは内的な精神構造としてのコンピテンシーという概念化によって補われる必要があると説明する。さらに，Weinert (2001)を参照し，多様でダイナミックに相互に関係する構成要素は生活の中で直面する「複雑な要請」の特徴によって規定されると述べる。

次に，Canto-Sperber & Dupuy (2001)，Haste (2001)，Perrenoud (2001)，Witt & Lehmann (2001)，Oates (1999)を挙げて，コンピテンシーの内的構造の構成要素としては，認知的スキルや知的能力が挙げられるのは明らかであるが，動機づけ，情動，価値などの社会的行動的構成要素が含まれることも広く合意されているとしている。

その上で，Le Boterf（1994，1997）を参照しつつ，あるコンピテンシーを持つということは，構成要素となる諸資源を持つことのみならず，適切な時に複雑な状況において，そうした諸資源を適切に動員し，それらを巧みに組み合わせる（orchestrate）ことを意味するとして，また，こうしたアプローチは，Weinert (2001) の述べる行為コンピテンス (action competence) と一致する，とも述べている。

以上が「内的構造」の内容の骨格であるが，まず，「コンピテンスへの機能的アプローチ」に続いて，ここでもWeinertとドイツの報告書が基本線となり，内的構造の諸要素について，様々な参照文献で補強されているという点を確認しておきたい。

ここでの基本的な問題として，「内的構造」の「構造」の構成が判然としない点を指摘できる。最終報告書では，44頁に「要請がコンピテンスの内的構造を規定する」と題する図が掲載されているが，知識，スキル，態度，動機づけ等が並列されているだけである（Rychen and Salganik 2003b : 44)。ここにその不明瞭さが象徴的に示されているようにも見える。また，この点は，コンピテンシーは知識＋スキル＋態度なのか，それともそれらを「活用」する別の能力なのか，という疑問にもつながる。

なお，一方で，「諸資源を適切に動員し，それらを巧みに組み合わせる」という説明については，その理論的根拠はLe Boterfの論文のみであり，それをWeinert論文が補強しているという構成も注意しておきたい(7)。

③「文脈依存性」

３番目の「文脈依存性」については，「私たちのコンピテンスモデルの基礎にある前提」として位置づけている。本項の説明によると，個人と社会の関係は弁証法的でダイナミックなものであり，行為は常にある社会的環境の中で，複数の社会的領域に構造化されているある文脈の中で起こる。また，要請や効果的な遂行及び行為の基準が形づくられ，個々人がそれに対処するために行為するのはこうした社会的領域の中においてである。コンピテンスの文脈化は，コンピテンスはそれが開発され用いられる文脈と切り離すことができないとする，「状況に埋め込まれた学習」理論と響き合うものである，とも述べている（Rychen and Salganik 2003 b : 45-46)。

なお，本項で参照されているのは，Gonczi (2003)とOates (2003)の２論文のみである。いずれも第２回国際シンポジウムの資料集（Rychen, Salganik and McLaughlin 2003）に掲

載されているものである。この点は，先に見たように，「概要」（2005年）に至るまでのコンピテンシーの定義の経緯の中で，当初は「文脈」が必ずしも重視されていなかったことと重ねて考える必要がある。また，この文脈依存性は，「コンピテンスモデルの基礎にある前提」として位置づけられている点も確認しておきたい。

最終報告書の本章の最後では，本章では，要請の中心性，個々人の心理社会的前提条件，及び文脈を強調するコンピテンスの定義の定式化に焦点を当ててきたと述べ，①要請，②心理社会的要素，③文脈の３要素を改めて確認するとともに，このコンピテンスのホリスティック・モデルは，理論的に基礎づけられ，キー・コンピテンシーの定義及び選択のための概念的基礎を描くことにより，DeSeCoの架橋的参照枠の決定的な要素を構成する，と締め括られている（Rychen and Salganik 2003 b : 62）。

３．Weinertのコンピテンシー論

Rychen ＆ Salganik論文における参照論文とその被引用回数を見ても，Weinertの論文がコンピテンシーの定義の中で果たした役割は大きい。F. E. Weinertは，当時，ドイツのマックスプランク心理学研究所の教授であったが，DeSeCoの最初の報告書（2001年）において「コンピテンスの概念：概念的明確化」と題する章（第３章）を担当している（以下，「2001年論文」と略記）。彼はその前にも，1999年４月付けで報告書「コンピテンスの概念」もまとめている（以下，「1999年報告書」と略記）。これは，DeSeCoから，心理学の観点からコンピテンス概念の先行研究の分析を依頼されたものである（OECD/SFSO 1999 : 1）。ここでは，まず，2001年論文を参照し，次いで1999年報告書に遡って検討したい。その際に，最終報告書との対比及び論文内の構成という２つの観点から分析する。

（1）2001年論文

同論文は，まず，科学的なアプローチにおいても，コンピテンスの概念については共通の概念的枠組みがないとし（Weinert 2001 : 46），その上で，コンピテンスの理論的な定義及び解釈に関する７つの異なる方法，すなわち，一般的な認知的コンピテンシー，特定の認知的コンピテンシー，コンピテンス・パフォーマンスモデル，コンピテンス・パフォーマンスモデルの修正版，認知的コンピテンシーと動機的な行為の傾向，主観的及び客観的コンピテンス概念，行為コンピテンス，について叙述する（Weinert 2001 : 46‒51）。次に，キー・コンピテンシーとメタコンピテンシーに言及した上で，「コンピテンスの概念化の困難」について，10点にわたって述べている（Weinert 2001 : 56‒62）。最後には「結語」として，「明らかに，社会科学の領域において，コンピテンス，キー・コンピテンス，そしてメタコンピテンスには概念的な問題がある。したがって，私は統一された定義については先延ばしとし，コンピテンス概念の使用に関する実用的な（pragmatic）結論に限定したい。」としたうえで（Weinert 2001 : 62），次の5点を述べている。

すなわち，①コンピテンスの概念は，複雑な要請にうまく対処するために，個人またはその集団にとって役に立つ必要な前提条件（prerequisites）にかかわる。あるコンピテンシーの（心理的）構造は，要請の論理的及び心理的構造に由来する。②ある要請にうまく対処するために必要な前提条件が認知的及び（多くの場合）動機的，倫理的，意志的，及び／又は社会的要素から構成される時にこの概念が用いられる。③コンピテンス概念には，要請や課題に対処するために十分な程度の複雑性が求められることが含まれている。④学習プロセスは複雑な要請の十分な習熟のために前提条件の獲得の必要な条件である。⑤キー・コンピテンシーとメタコンピテンシーは概念上区別されるべきである。キー・コンピテンシーはあるコンピテンシーが日々の，労働に関わる，あるいは社会生活の多くの異なる，同様に重要な要請の習熟に用いられるときにのみ思い起こされるべきである。メタコンピテンシーは自分のコンピテンシーに関する叙述的または方法的知識に関わる場合にのみ用いられるべきである。以上の５点

である。

こうした内容のWeinert論文について，いくつか留意する点がある。

第１は，「要請」についてである。上記の５点のすべてに「要請」という言葉が出てくる。しかし，本文において，たとえば，冒頭のページにおいて，哲学や心理学等の諸学問で用いられるコンピテンスは「ある特定の目的を達成するために」必要な能力，熟達又はスキルのシステムであるとされ（Weinert 2001：45），中間的な部分では，「コンピテンス及びコンピテンシーはまず第一に，認知的社会的及び職業的な達成にとって必要な精神的条件として理解されるべきである」とまとめられており，必ずしも「要請」が強調されているようには見えない。

第２は，「複雑な」要請，あるいは「複雑性」についてである。本文では，「要請」同様に「複雑な要請」も強調されているようには見えない。「複雑性」に至っては本文にどこで用いられていたか判然としない。一方で，この「複雑性」は「省察性」の議論で中核的な役割を果たしたKeganの論文のキーワードである（藤井2018）。Weinertの本文の記述とは別に，Keganのキーワードが「結語」において唐突に挿入されている印象がぬぐい難い。

第３は「行為コンピテンス」についてである。最終報告書において，Le Boterfの議論を補強するものとしてWeinertの議論が参照されているが，本論文においてWeinertが「行為コンピテンス」について言及しているのは，「コンピテンスの理論的な定義及び解釈に関する７つの異なる方法」の１つとしてであり，特に行為コンピテンスが強調されているわけではない（Weinert 2001：51）[(8)]。

第４は，「文脈」についてである。最終報告書では，文脈はコンピテンシー概念の３つの要素の１つとして認められているのに対し，Weinert論文では，言及はあるものの（たとえば，Weinert 2001：58-59）３つの構成要素の１つとして認識されているわけではない。

第5は，「概念的実用主義」についてである。先述の通り，最終報告書では，Weinertの呼ぶ「概念的実用主義」すなわち，科学的に説得力があり実用的にも役に立つ仕方でコンピテンスという用語を定義する，としているが（Rychen and Salganik 2003 b：42），Weinertは「概念的な実用主義」という言葉を用いているわけでもなく，先の「結語」にあるように，「コンピテンス概念の使用に関する実用的な結論に限定」すると述べているにとどまる。この点は，「コンピテンス概念の実用的な定義のためのこうした最低限の規準の考察は，理論的な有用性というよりも実際的な有用性をもつ」として，最後にも繰り返されている（Weinert 2001：63）。

なお，本論文は，次のような不吉な暗示で終わっている。

「それにもかかわらず，学界，政策，教育は，Paul Valeryの次のジレンマで途方に暮れる大きな危険がある。すなわち，単純なものは全て理論的に誤りであり，複雑なものは全て実用的に無益である。コンピテンス概念の科学的基礎を発展させるために求められる小さな経験的ステップと広い規範的な歩幅を融合させることに成功する戦略はあるのだろうか。現時点で，我々はそれを知らない。しかし，にもかかわらず，それを試みるべきである。」

(2) 1999年報告書

次に，Weinertの最初の報告書も検討しておきたい。

1999年報告書も最初に，コンピテンスについては「多くの多様な理論的アプローチがあるものの単一の共通の概念的枠組みはない」としたうえで（Weinert 1999：6），９つの理論的アプローチを紹介し，コンピテンスの概念化に係る10の問題を指摘したうえで，コンピテンスの概念の構成要素について分析し，「示唆と提言」を最後に行っている。2001年報告書の不吉な暗示はこの1999年報告書の最後にもまったく同様に記されている。

本報告書の結論に当たる「示唆と提言」では，用語の使用においても理論的な参照枠においてもコンピテンスの定義は非常に様々であり，小さく漠然としたコアしか残らない。したがって，科学的及び実用的なねらいを達成するために，

定義上の基準として，様々なコンピテンス概念のどの要素を用いるべきかを決定する必要がある，と述べる。その上で，コンピテンスとコンピテンシーは「認知的社会的及び職業的な達成のために必要な精神的諸条件であると理解されるべきである」との定義を示している。さらに，このように概念上の限定を加えたとしても依然として２つの選択肢が残るとして，次の２つを提示する。１つは条件的（conditional）アプローチであり，具体的な問いは「どのような認知的コンピテンシーがあるのか」というものである。もう１つが最終報告書でも採用された「機能的アプローチ」であり，その問い方は，「どのような認知的コンピテンシーが任務や任務の要請の習熟に必要か」というものである（Weinert 1999 : 26-27）。そしてWeinertが推奨するのも後者のアプローチである。ただし，その理由は，個人差を計りやすい，テストに用いることが可能であるといったものである（Weinert 1999 : 27-28）。

本報告書には，最初に「要旨」が付されている。それによると，「本報告の意図された使用法」として，「国際的及び国内的な参照システムにおいて学校を基盤とした達成度(achievement)の比較のための概念的基盤を提供する」と説明されており，少なくとも著者であるWeinertは達成度を計るという限定された意図で本報告書を作成したと思われる。また，この「要旨」には，「コンピテンスは，学習された，認知的で要請に特化した実行能力の特性（cognitive demand-specific performance disposition）であるとみなされ，関連するメタコンピテンスと動機づけに係る属性がこの構成概念の分析に含まれることを推奨する」と記されており，ここに初期の定義を見ることができる。本論の表1に挙げた定義はこの「要旨」によるものである。しかし，報告書の本論で論じられているのは上記の内容であり，この定義がどこから来たものなのか，本論を読んでも判然としない(9)。

４．「キー」・コンピテンシーとコンピテンシー

最後に，コンピテンシーとキー・コンピテンシーの違いについて見ておきたい。

DeSeCoプロジェクトの正式名称は“Definition and Selection of Competencies”である。ところが，2005年の「概要」のタイトルは，“Definition and Selection of Key Competencies”となっている。遡ってみると，2003年の最終報告書も2001年の報告書のタイトルも，さらには2000年のINES総会での報告のタイトルも“Competencies”ではなく，“Key Competencies”となっている。こうしたタイトルからも，同プロジェクトは早期から“Key Competencies”の定義を模索していたことがわかる。

細尾（2017）は，コンピテンシーとキー・コンピテンシーは異なった概念であるとOECDは説明している，と述べている。コンピテンシーは文脈依存性を持ち，キー・コンピテンシーは一般性を持つとそれぞれ区別して定義している，というのがその理由である（細尾 2017 : 123）。たしかに，先に見たように，最終報告書のコンピテンシーの３つの要素のうち，３番目のものは「文脈依存性」であり，コンピテンシーは文脈と「切り離せない」（inseparable）ものとしてとらえられている（Rychen and Salganik 2003b : 46）。これに対し，キー・コンピテンシーは多様な要請に応え，様々な任務において効果的であるため「文脈から独立した」（context-independent）ものとみなされうる（Weinert 2001 : 52）。

最終報告書（2003年）では，「コンピテンスとキー・コンピテンス」と題された項がある。それによると「上記の基準のすべてを満たさないコンピテンシーは，キー・コンピテンシーとはみなされない」とされている（Rychen and Salganik 2003b : 54）。まず，キー・コンピテンシーはコンピテンシーの中に含まれていると読めることを確認したい。その上で，「上記」とは次の段落のことである。

「特に重要なコンピテンシーに焦点を当てるというDeSeCoのねらいに即して，キー・コンピテンシーは，まずは，重大な又は重要なコンピテンシーの同義語として用いられている。次章でより詳細に述べられるように，DeSeCoは，

人生の成功とうまく機能する社会に貢献し，生活の様々な領域を通じて役に立ち，すべての個々人にとって重要な，個人に基づくコンピテンシーとしてキー・コンピテンシーを考える。コンピテンスの広範な概念と一致して，それぞれのキー・コンピテンスは相互に関連する認知的スキル，態度，動機づけと情動，そして他の社会的要素の組み合わせである。」（Rychen and Salganik 2003b : 54）(10)

この基準の中身については，少なくとも３種に分けることができる。第１はDeSeCo独自の観点である。「人生の成功とうまく機能する社会への貢献」と「すべての個々人にとって重要な」という基準がそれにあたる。第２は，「生活の様々な領域を通じて役に立ち」という領域横断性である。第３は，「認知的スキル，態度，動機づけと情動，そして他の社会的要素の組み合わせ」という基準である。しかし，この観点はコンピテンシーの定義において言及されていた「内的構造」と同じ内容であり，「キー」・コンピテンシーの基準とは言い難い。

このように分析すると，第３の基準は，キー・コンピテンシーをコンピテンシーから識別する基準とはならないので，除いて考えることができる。そして，第１の基準は，コンピテンシーの定義から派生したものではなく，DeSeCoプロジェクトの目的を被せたものである。最初の年報（1998年年報）に同プロジェクトの目的がいくつか示されているが，その最初のものが「国際的な文脈の中で学際的な科学的アプローチを通じて，個々人が全般にわたり成功裏に責任のある生活を送り，社会が現在および将来の挑戦的課題に対処するために不可欠な，一連の最も関連するコンピテンシーを同定し定義すること」とある（OECD/SFSO 1999 : 1)。そして第２の基準はコンピテンシーの定義に含まれる要素の１つである「文脈依存性」との齟齬が問われる内容であるが，そうした観点からの説明はない。そのため，コンピテンシーの定義とキー・コンピテンシーの基準が不適合であるようにも映る。

なお，先に見たWeinertの2001年論文でも，「結語」においては，キー・コンピテンシーは「多くの異なる，同様に重要な要請の習熟に用いられるときにのみ」用いられるべきと述べられてはいた。しかし，同論文の本文で述べられていたこと（Weinert 2001 : 51-54）は，「キー・コンピテンスの概念はコンピテンスの概念と同様に，あいまいで不明瞭である」（Weinert 2001 : 51）ということであり，どうして「結語」においてそのようにまとめられるのか，その理路が判然としない。

おわりに

DeSeCoプロジェクトのコンピテンシーの定義は，「特定の文脈において，心理社会的な資源（スキルや態度を含む）を活用し動員することにより，複雑な要請に対処する能力」であり，①複雑な要請，②心理社会的資源，③特定の文脈の3要素から構成されている。本論は，策定の過程の分析からその理論的根拠の検討を試みたが，この定義に孕まれるいくつかの疑問点を提起するにとどまるものとなった。

まず，①複雑な要請については，「特定の問題を解決するため」でもなく，「認知的社会的及び職業的な達成」のためでもなく，「複雑な要請に対処する」ためという定義となったのは，DeSeCoプロジェクトが「機能的アプローチ」という定義の仕方を選択したからであり，定義の仕方があらかじめ定義された結果ともいえる。そしてなぜそのような選択をしたかについては，同プロジェクトが当初から，「個々人が全般にわたり成功裏に責任のある生活を送り，社会が現在および将来の挑戦的課題に対処するため」という要請に応えるためのコンピテンシーを求めていたから，ということになる。

次に，②心理社会的資源については，内的構造が強調されてはいるものの，その構造がどのように構成されているのか，中身が見えない。この点は，コンピテンシーは知識＋技能＋態度等なのか，それを「活用」し，「組み合わせる」別の能力なのかという疑問とも重なる。

さらに，③特定の文脈については，キー・コンピテンシーとの論理的関係が問われる。コン

ピテンシーが文脈依存的であるならば，キー・コンピテンシーの要件である「生活のさまざまな領域を通じて役に立つ」という点とどのように両立可能なのか十分な説明がない(11)。

ただし，こうした検討はプロジェクトの検討経過を内在的に検討した結果であり，たとえば，文脈依存性と一般性・汎用性の関係は，「状況に埋め込まれた学習」理論においても同様に検討すべき，あるいは検討されてきた課題である。そうした意味で，外からの視点で検討すべき課題でもある。

また，Weinertの苦難の成果のように見える２つの論文に示されているように，コンピテンシーの理論的・概念的検討は容易ではない。しかし，それでもその再検討が可能であるところにDeSeCoプロジェクトの学術的意義があるともいえる。それは，たとえば，わが国におけるこの度の学習指導要領改訂の際のキーワードの１つとなった「学びに向かう力」の理論的根拠の検討と比較してみると明らかであろう。そうしたことも含めて今後の課題としたい。

注

（1）DeSeCoプロジェクトの年報，シンポジウム報告書，国別報告書等の資料については，同プロジェクトのホームページ（deseco.ch）に掲載されている（参考文献一覧では，煩雑さを避けるため個別の資料にURLを付していない。なお，最終閲覧日はすべて2019年３月30日）。参考文献一覧に挙げた資料のうち，DeSeCoプロジェクトのホームページに載っていないものについては，URLを付している。この他に，出版物を参照した。

（2）キー・コンピテンシーの概要及び最終報告書については翻訳書があるが（立田慶裕監訳 2006），本論では，訳語の一貫性を保つため，翻訳書を参照しつつも，独自の訳を当てている。

（3）その具体例として，「たとえば，効果的にコミュニケーションを図る能力は，個人の言語の知識，実際的なITスキルと話している相手に対する態度を活用するコンピテンシーである。」と説明されている（OECD 2005 : 4）。

（4）本論において原語の翻訳に関わらないところで筆者が用いる場合は便宜上「コンピテンシー」で統一している。

（5）以下の最終報告書等でもコンピテンシーとコンピテンスの混在は明らかであるが，原語に応じて訳を当てている。

（6）2000年のINES総会の報告においても，DeSeCoは機能的アプローチに焦点を当てているとして，その注において，「この観点は，認知的能力やスキルのための内的な精神構造に焦点を当てるアプローチとは対照的である」とされている（Rychen and Salganik 2000 : 8)。

（7）Weinert論文ではLe Boterfは参照されていない。Le Boterf を参照しているのは同じフランス語圏のPerrenoudの論文である。最初の報告書において，Le Boterf を参照しているのはPerrenoud論文だけである。なお，細尾によると，Le Boterfが述べていることは，コンピテンシーというものは，知識や能力のように資源として蓄積されるものではなく，資源を動員するというまさにそのことに存する，ということにある（細尾 2017 : 105)。

（8）なお，行為コンピテンスにおいて参照されているのは，Boyatiz (1982)とLévy- Leboyer (1996)であり，いずれも経営学者である。

（9）吉田（2013）によると，Weinert自身のコンピテンシーの定義は，「特定の問題を解決するための，個々人の自由意思によって操作可能な，あるいは習得可能な認知的能力・技能であり，（中略）認知的能力・技能と結びついた動機的・意欲的・社会的構えや能力である」というものである（吉田 2013 : 45)。

（10）ここでも原語に即して訳している。すなわち，項のタイトルは「コンピテンス」であるが，本文は，(最後の１文を除き) コンピテンシーとなっている。

（11）この点については，最終報告書に「転移と適応」の項があり，その検討により両者の両立が可能と解釈される可能性はある。

参考文献一覧

育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容

と評価のあり方に関する検討会（2014）「論点整理」（http://www.mext.go.jp/ component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335_02.pdf）（最終閲覧2019年４月30日）

今西幸蔵（2008）「キー・コンピテンシーとDeSeCo 計画」,『天理大学学報』60(1)

倉田桃子（2017）「PISAとキー・コンピテンシーの形成過程：DeSeCo計画における議論の検討」『公教育システム研究』16，1－29.

奈良勝行（2010）「OECDコンピテンシー概念の分析と一面的「PISA型学力」の問題点」『和光大学現代人間学部紀要』3

福田誠治（2017）『ネオリベラル期教育の思想と構造』東信堂

藤井穂高（2017）「OECDのキー・コンピテンシーの理論的根拠に関する一考察―「３つのカテゴリー」に焦点を当てて―」,『筑波大学教育学系論集』42.1.

藤井穂高（2018）「OECDのキー・コンピテンシーの理論的根拠に関する一考察（2）―「省察性」に焦点を当てて―」,『筑波大学教育学系論集』43.1.

細尾萌子（2017）『フランスでは学力をどう評価してきたか　教養とコンピテンシーのあいだ』ミネルヴァ書房.

松下佳代編著（2010）『〈新しい能力〉は教育を変えるか　学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房.

宮嶋秀光（2010）「人格とキー・コンピテンシー―教育の目標概念に及ぼすDeSeCoプロジェクトの影響について―」『大学・学校づくり研究』2.

吉田成章（2013）「ドイツにおけるコンピテンシー志向の授業論に関する一考察」，広島大学大学院教育学研究科教育学教室編『教育科学』29.

渡邊沙織（2009）「『キー・コンピテンシーの定義と選択』によるコンピテンシー概念に関する研究― “Key Competency” と “Meta Competency” の比較を中心に―」『生活科・総合的学習研究』7.

Boyatzis, R. E. (1982). *The competent manager : A model for effective performance*, John Wiley & Sons.

Canto-Sperber, M.and Dupuy, J.-P. (2001). Competencies for the Good Life and the Good Society. In Rychen and Salganik (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.

Gonczi, A. (2003). Teaching and Learning of the Key Competencies, In Rychen, Salganik and McLaughlin (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*.

Haste, H. (2001). Ambiguity, Autonomy, and Agency: Psychological Challenges to New Competence. In Rychen and Salganik (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.

Keating, D. P. (2003). Definition and Selection of Competencies From a Human Development Perspective. In Rychen, Salganik and McLaughlin (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*, Swiss Federal Statistical Office.

Kegan, R. (2001). Competencies as Working Epistemologies: Ways We Want Adults to Know. In Rychen and Salganik (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.

Le Boterf, G. (1994). *De la compétence :Essai sur un attracteur étrange*, Les Editions d’Organisation.

Le Boterf, G. (1997). *De la competence à la navigation professionnelle*, Les Editions d’Organisation.

Levy, F. and Murnane, R. J. (2001). Key Competencies Critical to Economic Success. In Rychen and Salganik (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.

Lévy-Leboyer, C. (1996). *La gestion des compétences,* Les Editions d’Organisation.

Oates, T. (1999). *Analysing and describing competence – critical perspectives,* QCA.

Oates, T. (2003). Key Skills/Key Competencies: Avoiding the Pitfalls of Current Initiatives, In Rychen., Salganik and McLaughlin (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*.

OECD/DeSeCo/Rychen (2003). Summary of the final report “*Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society*”(http://www.netuni.nl/courses/hre/ uploads/File/deseco_finalreport_summary.pdf)（最終閲覧2019年４月30日）

OECD (2005). *The Definition and Selection of Key Competencies Executive Summary*.

OECD/SFSO (1999). *DeSeCo Annual Report 1998.*

OECD/SFSO (2000). *DeSeCo Annual Report 1999*.

Perrenoud, P. (2001). The Key to Social Fields: Competencies of an Autonomous Actor. In Rychen and Salganik (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.

Rychen, D. S. (2001). Introduction. In Rychen and Salganik (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.

Rychen, D. S. (2004). An overarching conceptual framework for assessing key competences. Lessons from an interdisciplinary and policy-oriented approach. In Descy, P. and Tessaring, M. (eds). *The foundations of evaluation and impact research*, Cedefop Reference series, 58. (http://www.cedefop.europa.eu/files/BgR1_Rychen.pdf)（最終閲覧2019年４月30日）

Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (2000) *Definition and Selection of Competencies, A Contribution of the OECD Program, Definition and Selection of Competencies (DeSeCo): Theoretical and Conceptual Foundations, INES General Assembly 2000*.

Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (eds.) (2001). *Defining and Selecting Key Competencies*, Hogrefe & Huber.

Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (2002). *DeSeCo Symposium – Discussion Paper*.

Rychen, D. S., Salganik, L. H. and McLaughlin, M. E. (eds.) (2003). *Contributions to the Second DeSeCo Symposium*, Swiss Federal Statistical Office.

Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (eds.) (2003a). *Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society*, Hogrefe & Huber.（ドミニク・Ｓ・ライチェン，ローラ・Ｈ・サルガニク編著（立田慶裕監訳）『キー・コンピテンシー　国際標準の学力をめざして』明石書店，2006年）

Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (2003b). A holistic model of competence, in Rychen and Salganik (eds.) (2003a). *Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society*.

Rychen, D. S. and Salganik, L. H. (2003c) Highlights from the OECD Project *Definition and Selection of Competencies : Theoretical and Conceptual Foundations (DeSeCo)*. (https://eric.ed.gov/?id=ED476359)（最終閲覧2019年４月30日）

Weinert, F. E. (1999). Concepts of Competence, OFS BFS UST/NCES/ OECD. (https://pdfs.semanticscholar.org/ 8b88/efa9dd5e0a4b605aea6e5e3b9ec640beb089.pdf)（最終閲覧2019年４月30日）

Weinert, F. E. (2001). Concept of Competence: A Conceptual Clarification In Rychen and Salganik (eds.) *Defining and Selecting Key Competencies*.

Witt, R. and Lehmann, R. (2001). *Definition and Selection of Key Competencies in Germany.*

A Study on the Theoretical Foundations of Key Competencies of OECD (3)
Focusing on “Competencies”

Hodaka FUJII

In this paper, we focus on the “competencies” of Key Competencies of the DeSeCo project and examine its “theoretical foundations.”

The definition of the competencies of the DeSeCo project is “the ability to meet complex demands, by drawing on and mobilizing psychosocial resources (including skills and attitudes) in a particular context.” Therefore, it is composed of (a) complex demands, (b) psychosocial resources and (c) particular contexts.

This paper examines the rationale of this definition based on the analysis of its formulation process. The results of examination of this paper are as follows.

First, (a) complex demands were defined not to “reach a specific goal” nor attain “cognitive, social, and vocational achievement” but to “meet complex demands.” This is because the DeSeCo project has selected the definition of “functional approach,” and it can be said that the definition is pre-defined by this approach. And as to why such a choice was made, the project needed from the beginning the competencies “that are vital for individuals to lead overall successful and responsible lives and for society to face the challenges of the present and the future.”

Next, about (b) psychosocial resources, although the internal structure is emphasized, we can’t see how the structure is structured. This point also overlaps with the question of whether competency is knowledge + skill + attitude or another ability to “mobilize” and “orchestrate.”

In addition, as to (c) particular contexts, we should require a logical relationship with key competencies. If competencies are context-dependent, there is no sufficient explanation on how these can be compatible with the key competency requirement of “relevant across different spheres of life.”

However, these results are ones of an intrinsic examination of the project's formulation process. For example, the relationship between context dependency and context independency should be examined in the “situated learning” theory as well. In this sense, it is also an issue that should be examined from an external perspective.